『ブッデンブローク家の人々』とプロテスタンティズム

髙　山　秀　三

要　旨

トーマス･マンは信仰の人ではなかったが，その作品にはキリスト教的なモチーフが多く取り扱われている。マンにとって，キリスト教はヨーロッパ文化の根底にあるものとして生涯をとおして大きな関心の対象だった。『ブッデンブローク家の人々』はプロテスタンティズムを精神的基盤とするドイツの市民社会を舞台とする小説であり，マンにとってはじめて本格的に宗教を取り扱うことになった作品である。この小説では，市民社会のなかでプロテスタンティズムが息づいている様相が，人々の具体的な生活を通して活写されている。舞台となっている時代は大きな社会変動の時代であり，プロテスタンティズム信仰の衰退期でもあった。『ブッデンブローク家の人々』は資本主義の進展や教養市民層の興隆などの社会変動に対応できないままに，信仰を失っていった伝統的な市民家族の四代にわたる没落の歴史である。本論はこの一族の没落と信仰喪失の過程に焦点をあてている。

キーワード：『ブッデンブローク家の人々』，プロテスタンティズム，市民社会，芸術，教養市民層

1．トーマス・マンと宗教

トーマス・マンはトルストイやドストエフスキーがそうであるような意味での宗教的な作家ではない。つまり真剣に神をもとめ，人生の導き手にしようとするような作家ではなかった。宗教的な活動に熱心であったとはいえないし，神やキリストへの思いをものものしく語ることもなかった。マンはあらゆる現象を距離をおいて眺めるイロニーの作家を標榜していた。あらゆる判断において冷静で用心深く，相対的で複眼的な視点を保つことを身上としていた。こうした精神の姿勢と，信仰というひたむきな精神の姿勢は容易には両立しえない。

他方，マンは少なからぬ作品で宗教的なモチーフを取りあげている。明白に宗教的なものを扱った作品としては，旧約聖書に題材をとった『ヨゼフとその兄弟』，神学上の議論が大きく扱われ，悪魔の幻影が登場する『ファウストゥス博士』，そして中世のグレゴリウス教皇の堕罪と恩寵の伝説を題材とした『選ばれた人』などが挙げられる。さらに広義の宗教的なモチーフについて言えば，それはマンの作品全般に浸透している。たとえば，『トニオ・クレーガー』の主人公は生まれ育った町のプロテスタント的な精神風土や，いかにもピューリタン的な禁欲的な人生を送った父の姿のなかに自身の原点と規範を見い出す。『魔の山』に登場するイエズス会の修道士であるナフタは啓蒙主義者のセテムブリーニと神学的な議論を繰り広げ，サナトリウムの王者というべきコーヒー王ペーペルコルンには十二使徒をしたがえたイエス・キリストの似

姿を読みとることができる。

しかし，大筋において，マンにとっての宗教は信仰の対象というよりは，はるかに人間とその社会を構成する重要な要素として客体化して眺められ，写し出される観察対象である。精神的な渇望や人生上の苦悩から切実に求められるものではなく，作品に登場するもろもろのものの背後にあってその存在を規定する文化的価値観として意味づけられ，描かれるものである。もちろん，あらゆる文化は陰に陽に宗教的なものに浸透されているし，その文化のなかで成立する文学も同様である。人間の精神が拠りどころとするメタレベルの価値を宗教的なものと呼ぶならば，人間の文化の基底にはかならず宗教的なものが存在する。だとすれば，トーマス・マンに限らず，なんらかのかたちで広義の宗教が影を落とさない文学は存在しないだろう。

キリスト教が隅々まで浸透しているヨーロッパの文化においては，特に宗教に関心をもたないとしてもそのなかで育った作家であれば，作品の広範な部分にキリスト教の影響が及んでいることは自明といっていい。中世以来のヨーロッパを支配してきたキリスト教会への信仰はマンが生きた時代においては衰退の過程にあったが，その精神は明白な信仰というかたちをとらずとも依然として文化のなかに生きつづけていた。マンは生活のなかで信仰を表出することはほとんどなかったが，その文学にキリスト教の影響が濃厚に認められるのは当然のことだった。本稿は長編小説『ブッデンブローク家の人々―ある家族の没落―』（1901，以下原則として『ブッデンブローク』と略記）を取り上げ，そこにあらわれたマンの宗教への関心を検証することを主題としている。

2. 初期短編のアウトサイダーたち

マンがその創作においてキリスト教への関心を本格的に示したのは，はじめての長編である『ブッデンブローク』である。これ以前の作品はたとえば『小さなフリーデマン氏』や『道化者』がそうであるように，芸術家志望の青年である作者自身の社会的異端者としての不安がほとんど直截に反映された，ディレッタント的な人間の個人的で局所的な世界を描くものだった。それらの小説に登場する人物は大きな不安や絶望を抱えているものの，宗教による救済がその脳裏に浮かぶことはない。総じて創造性を欠いた，ディレッタントとしての芸術的な関心を別にすれば，人生を導くような何らの支配的な価値も持たないことが彼らの精神の危機を形成し，絶望や破滅につながっている。たとえば『道化者』の主人公は実生活を軽蔑し，いくばくかの遺産がある点で若いころのマンを思わせるが，早々と隠遁生活に入り，読書や芸術を趣味とする自由で平穏な暮らしをしていた。しかし，とある令嬢への報われない恋愛がきっかけとなって自分を世間的には「不幸で滑稽な輩」（2.1-158）でしかないと見なすようになり，「実際，『道化者』として生まれつくことが，こんなにも不吉で不幸なことであるとは，だれが思っただろう！だれが思うことがあっただろう！」と慨嘆するに至る。（2.1-159）

これらの初期短編から『ブッデンブローク』出版に至る頃のマンは，心身の両面において不安定な状態にあった。1891 年の父の死のあと，マン家はミュンヘンに転居するが，落第を繰り返していた劣等生のトーマスだけは，しばらくリューベックに残って学校を続けたあと家族を追ってミュンヘンに移動する。保険会社の無給社員になったり，ミュンヘン工科大学の聴講生になったりしながら，遺産のおかげで経済的には余裕のあるなかで本格的に文学に取り組んでいく。イタリアに頻繁に旅行し，特に 1896 年から二年間の滞在のなかで『小フリーデマン氏』などいくつか短篇の傑作が生まれる。二十歳を少し出たぐらいの若年にしてマンはすでに有望な新人だった。大出版社のフィッシャーから長編を書かないかという誘いを受け，『ブッデンブローク』の執筆も始まる。しかし，そうした外面的な成功の裏でマンの精神状態はかなり不安定で，パレストリーナに滞在していたときには悪魔の幻覚を見たこともあるという。[1] また，1901 年 2 月 13 日付けの兄ハインリヒ宛ての手紙には「完全に本気の自殺計画を伴う本当にいやな抑鬱状態」[2] も語られている。気ままで自由な境遇は一面で喜びももたらしたが，社会的な安定や定住への志向がつよい苦労性のマンにとってはむしろ悩み多きものだった。『ブッデンブローク』で一躍世界的名声を獲得した後に書かれた自伝的小説『トニオ・クレーガー』（1903）には，マンと重なるところの多い主人公トニオが作家として活動を始めたころに暮したイタリアでの生活を「特別誂えの，放埒で破格の生活」と呼び，それを「心底嫌っていた」（2.1-265）という叙述があるが，ここにはマン自身の若年期の心情が反映していると見ていいだろう。

3. 市民社会とプロテスタンティズム

マン家をモデルとする市民家族の盛衰を描いた長編『ブッデンブローク家の人々』は，こうした不安と苦しみのなかから生まれた。故郷から離れ，異郷にあって，将来がわからない不安のなかで，四代にわたる北ドイツの家族の歴史のうちにみずからの出自を捉えなおし，再認識することが，この長編小説を書く若い作者のひそかな動機の一つとしてあっただろう。故郷の町を包み込んでいたプロテスタンティズムは，そこに生きたブッデンブロークという一族の精神を形成する重要な要素として描かれることになる。その屋敷の入り口の上には「主は守り給う」（B47）という金言が掲げられ，家族の歴史を記すノートには良心に恥じることのない仕事をするようにという敬虔な父祖の言葉が記されていた。（B62）この小説は，ドイツのプロテスタンティズムが日常のなかに息づいていた十九世紀前半から本格的な崩壊過程が始まった世紀後半の市民社会を生きた人びとを描き出している。[3] ブッデンブローク家の没落は時期的にプロテスタンティズムの本格的衰退と重なっている。信仰の衰退はブッデンブローク家においてもおおむね世代を追って進行する。もともとドイツの市民性にはプロテスタンティズムが大きく関わっている。個として神に向き合い，現世的な職業を超越神の意志を反映する天職（Beruf）と捉えることが，プロテスタント地域の内省的で勤勉な市民性の形成に寄与したのである。[4]

『ブッデンブローク』こそは，マンの創作において，宗教的な要素が目に見えるかたちで描かれた最初の作品である。駆け出しの作家にすぎなかったマンを一躍世界文学の寵児に押し上げたこの長編小説は，さまざまな点でマンの経歴上画期的な作品だったが，宗教的な要素が人びとの生活のなかに浸透し，その精神生活の重要な位置を占めている19世紀のドイツ市民社会の様相を活写している点でも画期的な作品だった。

4. 市民の発見

『ブッデンブローク』はマンの生家をモデルに北ドイツのハンザ都市に生きる一族の四代にわたる盛衰を描く小説である。時間的には四十年余りに及び，空間的には一つの地方都市全体を包み込んで繰り広げられる一大叙事詩であり，ブッデンブローク家とそれを取り巻く市民たちの姿が詳細に描かれている。マンは後年,『非政治的人間の考察』においてみずからの作品史を振り返り，この大作は「これに続く創作の足掛かりとなるような，人間的芸術的な土台」（13.1-98）になったと語っている。実際，故郷をモデルとする生活空間のなかで互いに深く関わりながら生きる多くの人びとをこの作品のなかで描き，彼らの意識を追体験したことで，マンの文学は疎外感に苦しむ人間のルサンチマンに満ちた閉鎖的な意識を描くそれまでの局面から解き放たれ，社会的に開かれた性格をもつことになる。一面においては,『ブッデンブローク』もまた，これまでの短篇と同じように社会から脱落した芸術的な人間を描いている。それどころか，この小説には，ハンノー・ブッデンブロークやその叔父クリスチャンのような純粋種からハンノーの父トーマスのような亜種までを含んで，それぞれに独自の個性をもつ幾人もの社会的逸脱者がそれぞれに没落に向かう家族の運命を背負って登場し，破滅に向かう姿が多様なかたちで大きく取りあげられている。しかし，この長編は同時に，初代のヨハン老人を筆頭とする，物理的にも精神的にも地方都市の中枢に位置し，伝統を重んじる堅実な市民たちを，その心理的な面を含めて丹念に，しばしば共感的にマンが描いたはじめての作品だった。

『ブッデンブローク』で描かれる市民たちのモデルの大半はリューベックの住人であり，その主要人物の大半はマンが熟知している肉親だった。それらの市民たちのなかには，地方都市の社会生活に適応できず，精神の崩壊によって自滅していく者もいれば，自己を律し，堅実に生きる，しっかりした人間もいる。マンはこれらの人物をその行動と心理の両面から詳細に描き出した。つまり，これまで唯一，自身の代弁者であるかのように描いてきたはみ出し者の系譜に加えて，堅実な市民をも自身の出自に深く関わる存在として，自身がその系譜に連なる者として描き出したのである。

5. 不安と信仰

ブッデンブローク家の人々は世代を追うごとに次第に過敏になり，生活力を喪失し，神経症者，あるいは芸術的なディレッタントと呼ばれる者になっていく。小説のなかで特に大きな照明を当てられているのは，家族の歴史のなかでそれぞれその世代の支柱となる三世代の家督相続者たち，すなわちヨハン老人，ジャン領事，トーマス，そして彼らの後継者になるはずでありながら，その夭折によって家族の歴史に終止符を打つことになる四代目のハンノーである。小説の前半で描かれる先行の二世代，特に初代のヨハン老人は自分が置かれている社会の現実の上に両足をしっかりと置いた健全な市民である。ブッデンブローク家はリューベックという名だたるハンザ都市の指導的な地位にある一族である。ブッデンブローク家の記録に残る最初の祖先は16世紀末に北ドイツのパルヒムで暮した男である。その子孫は北ドイツ各地で拡大と繁栄を続けたが，そこから一人の男が出てリューベックに定住し，穀物商会を始めた。これがヨハン老人の父で，栄誉あるハンザ都市における上流市民としてのブッデンブローク家の礎を築いた。その家督を引き継いだヨハン老人は商会と一族をさらなる繁栄に導き，商人として活動する一方で，その経済力を背景にリューベックの自治に大きく関り，その地位を固めてきた。

小説はブッデンブローク家がまさにその繁栄の絶頂に達した瞬間から始まる。新たに買い取った屋敷に一族と賓客が集まり，にぎやかな祝宴が行われる。ところが，その陽気な雰囲気に水を差すような不吉な逸話が一人の賓客によって語られるのである。150年前に建てられたこの屋敷を所有していた一族はかつては繁栄を誇っていたが，次第に零落し，どこかに消えてしまったという。この没落はその一族の当主がいかがわしい男を自社の共同経営者にしたことが契機となっていた。ブッデンブローク家にとっては，この立派な屋敷への転居は一族の盛運の証明だが，この屋敷の歴史は不吉なものを含んでいたのである。ただでさえ重苦しくなった空気のなかで，ブッデンブローク商会の若主人であるジャン領事はこの話を引き取り，「暗く打ち解けない表情」でこう語る。（ジャン領事は正式名はその父と同じヨハンであり，作中ではしばしばヨハンとも呼ばれるが，本稿では区別のための便宜上，通称であるジャン領事と表記する。）

> 彼は何者かの力に引きずられているような様子でした。・・・（中略）・・・誰からも大してよく言われることのなかったゲールマークと結びつかせたものは何だったのでしょうか。彼は忌まわしい責任の一部を誰かに押しつけようとする欲求を感じていたに違いありません。破滅は必ずやってくると感じていたのですよ…（B25f.）

重苦しくなった空気をいっそう沈鬱にするようなこの発言に対して，70歳の堂々たる家父長であるヨハン老人は「それはお前のいつもの強迫観念じゃよ…」（B26）とたしなめるが，この言葉からはこうした暗い宿命論的な考え方がジャン領事の習い性であることがわかる。ヨハン

老人は若いころに啓蒙主義の洗礼を受けた世代で，人間の理性と意志の可能性を大きく評価しているのだが，ジャン領事は父の考え方を否定するような，人間の力を圧倒する宿命の存在を語っている。ここには，ジャン領事の不安感のつよい，悲観的にものごとを見る性格がよくあらわれている。また場にそぐわない話柄に深入りすることには，いくぶん偏執的で強迫的な性格を見ることもできる。ジャン領事は父親のように骨太な人柄ではないが，それでもすでに商会を引き継ぎ，大過なく運営している。しかし，その人格の根底には生へのつよい不安感がある。ジャン領事は信心深いプロテスタントだが，その宗教への傾斜の根本にはこうした不安感がある。

ジャン領事は新たにブッデンブローク家のものとなった屋敷の前の持主の没落を宿命論的な観点から語るが，それはあたかもブッデンブローク家にこれから訪れる運命を予示するような話だった。ジャン領事の不安は研ぎ澄まされた直感で未来を言い当てたともいえるし，逆にその過剰な不安が示す神経症的な性格が後の世代に増幅されて継承されたことが一族の没落を招いたともいえる。一般論としては，不安は必ずしも衰退を招くものではない。むしろ不安があるからこそ，思い上がることなく将来に備え，失敗を回避することが可能になる。しかし，過度の不安は多くの場合，目前の危険を回避することばかりを優先させたり，危険の過大視によるあきらめを生み，金縛りのような麻痺状態に人間を陥れる。それは，冷静で長期的な視野で事態を眺め，破局を免れるのに必要な手立てを打つことを妨げる。ジャン領事の不安感と神経症的な性格はその息子であるトーマスやクリスティアンに増幅されて受け継がれ，ブッデンブローク家を衰退に向かわせる一因となる。

四代の嫡子たちの歴史を軸として展開するこの小説の基本理念は生命力と精神化の逆比例的な相関関係であり，それは代を追うごとに骨太な生命力を次第に失い，その代償として文化への関心や芸術的な感覚を獲得していく一族の物語に託して描かれている。『ブッデンブローク』は文学史的に見れば，ボードレールなどに端を発し，シュニッツラーやホフマンスタールに継承され，美的意匠として19世紀末から20世紀初頭にかけて流行したデカダンスという文学潮流の影響下に書かれている。[5] 祝宴でジャン領事が示唆した不吉な運命は的中し，楽天的なヨハン老人と不安がつよいが堅実なジャン領事の父子が共同で行なってきた経営によってもたらされた今現在の商会の繁栄は，七年後のヨハン老人の死とともに終わる。その後の一族は神経症的なジャン領事と，その遺伝子をさらに濃縮して受け継いだ息子トーマスによる領導のなかで，運命に引きずられるように経済的な失策や，婚姻の失敗を繰り返しながら没落の道をたどることになるのである。

6. 信仰をめぐる物語としての『ブッデンブローク』

ジャン領事の娘であるトーニ・ブッデンブロークは小説の時間が流れる三十余年を最初から

最後まで生き通す主要人物であり，そのユーモラスで明朗な存在感によってこの没落の物語を過度の陰鬱さから救い，支えている。『ブッデンブローク』は幼いお転婆娘のトーニが新築された家のこけら落としの祝いで披露するルター派の教義問答暗誦で始まる。この教理問答は，町の参事会が1835年に改定して出版したばかりのものである。[6] 小説はトーニが最初に発する「それは何でしょう」（B9）という教理問答中で繰り返される決まり文句によって始まる。（Vgl. Kommentar, 1.2-229）このあと，トーニはこの文句に続く教理問答の冒頭部分を暗誦しようとして言葉につまるが，祖父母の助けで語り始める。「私は信じます。神様が私を…（中略）…あらゆる生き物と一緒に創造されたことを」（B9）という聖書中の人物の言葉で始まり，それに続けて神から授かった物をその人物が列挙していく詩句が続く。8歳のトーニは三世代の家族全員と来客の前で得意になり，子どもらしい懸命さでその詩句を暗誦していく。神から人間に家屋敷や妻子，食物，家畜が与えられたくだりを語る孫娘の一心な暗誦にヨハン老人は吹き出し，ではそれをいくらで売るかなどと話しかけて一同の笑いを誘う。開館劈頭，神聖なもの，宗教的なものは三世代が同居する大家族の家長によって商売の話にされ，冗談にされる。これに対して老人の息子である二代目のジャン領事は追従の笑いで応じるものの，「ああ，お父さん，あなたはまたしてもこの上なく神聖なものを冗談にされている！」（B12）と非難する。微妙に瀆神的な言動はヨハン老人の習い性であって，ジャン領事は常々これを苦々しく思っているのである。

ヨハン老人は啓蒙主義的な理性を奉じる現実的な商人であり，宗教に対しては市民社会の常識が要求する以上の思い入れはない。実際，この集いに招待されているマリア教会のヴンダーリヒ牧師との関係も良好そうであるが，この牧師もまた常識的な社会人の資質をもつ聖職者のようで，檀家の主人との関係は宗教的な対話を真剣に行なうようなものではなく，いたって世間的な性格のもののようである。牧師はナポレオンの軍隊がこの町に攻め込んできたときに一家をその略奪から救おうとした思い出を語り，さらにナポレオンの偉大さをヨハン老人と一緒に讃える。ところが，これに信心深いジャン領事は憤り，血相を変えてナポレオンを「人非人」と非難するのだが，老人と牧師はまともに取り合わず，「ほんのかすかなほほ笑みを交わし」（B31），冗談を言って話をそらしてしまう。ヨハン老人は宗教がまだ市民社会に深く根を張っていた時代のなかで，無難な範囲ではあるが開明的な（とは言っても啓蒙主義が教養人のあいだで盛んだったのは老人が若かったときのことであって，一面では時代遅れとも言えるのだが）近代的啓蒙の精神を誇示している。小説の始まりの1835年の時点で70歳だから，この老人は1765年頃の生まれである。キリスト教信仰に対して一定の距離をおいている老人は，世俗のなかでしたたかに立ち回り，商会を大きくしてきた実際家らしく，ナポレオンの偉業の裏面をなす非情さを自明のこととして受け入れている。人間社会の冷厳を当然のこととして受け取るこの老人に比べると，息子のジャン領事はより敬虔なキリスト教道徳の視点から物事をとらえている。

小説はその冒頭から北ドイツの一地方都市に根付いているプロテスタンティズムをめぐる三

代の血族のユーモアと緊張をはらんだやりとりで始まっている。キリスト教信仰は近代の進行とともに減じていくというのが一般的な理解であるが，ここでは小説に登場する四世代の初代であるヨハン老人より二代目のジャン領事のほうが敬虔であり，長じて父に従順な娘となるトーニは父への愛着のゆえか，あるいは子供らしい無邪気さからか，あるいは当時の子どもに課せられた義務なのか，ともかくも暗誦するまでに教義問答に親しんでいる。ヨハン老人がトーニの暗誦を茶化すのは，間接的にジャン領事の信心をからかっていることになる。もっとも，ヨハン老人は親としての顧慮から息子であるジャン領事の信心深さのなかにある不健康なものを皮肉らずにはいられないのであって，ヴンダーリヒ牧師との良好そうな関係から推測されるように，市民社会と家族の伝統としての信仰に対しては相応の敬意を払っているようである。ヨハン老人は健全な常識的市民として，息子の信心の裏にある神経症的な不安感と観念性に対して危惧を抱いているのである。

ブッデンブローク商会を創設したヨハン老人の父は，この商会の社訓として「わが子よ，昼は商売を楽しむがいい。しかし夜は穏やかに眠れるような商売のみをしなければならない！」(B62) という金言を残した。神意にかなう仕事だけをするようにというこの言葉はプロテスタンティズムの真摯な職業観念に呼応している。禁欲的でもあり良心的でもある点でプロテスタント的なこの祖父の言葉をジャン領事は息子への手紙にも記し，「私はこの考えを生きている限り神聖なものとして守るつもりだ」(B190) と決意表明をする。父のヨハン老人もまた良心的な商人として生きてきたことは，一族や隣人たちの信頼と畏敬に包まれてその中心に立っていることから推測されるが，しかし，実際的な感覚にたけた商人らしく，過度の倫理性にとらわれず，大筋において自分自身の好悪で闊達に物事にあたる。ヨハン老人は，この世の慣習を楽天的で単純な気質ゆえに疑いなく受け入れており，商売と信仰のあいだに葛藤がない。これに対して，プロテスタントらしい内省にとらわれ，自己の行為に対して懐疑の目を向けがちな息子のほうは，何をするのにも倫理的かどうかが判断に介在する。

ヨハン老人にはもう一人ジャン領事とは異腹の息子がいる。転居祝いのさなか，ヨハン老人にとって長子であり，ジャン領事にとって兄であるそのゴットホルトからこの新居獲得に絡んで遺産請求の手紙が届く。この手紙についての二人の反応も，信仰についてのそれぞれの違いを如実に示している。ゴットホルトは，その出生時に最愛の先妻が死んだ事情からヨハン老人にとってもともと愛することができない息子だった。その上，当時としては醜聞ともいえるような身分が低い女性と結婚したことで廃嫡され，弟のジャン領事が商会の後継者になっている。祝宴の後，父子は二人だけでゴットホルトから届いた遺産分配を要求する手紙について話し合う。手紙は，父がキリスト教徒としての良心をもって自分の正当な要求に応えるように訴えるものだったが，老人はこの要求を不当なものとみなす。ゴットホルトにはその身分違いの結婚の際に大金を与えたことで一件落着したものとして，これ以上の付き合いはしないし，金も出さないとヨハン老人はかねて宣言していた。にもかかわらず，キリスト教徒としての良心に訴

えてさらに遺産分配をもとめるゴットホルトの主張をヨハン老人は「宗教かぶれの銭欲しさ」（B51）と罵り，「取り澄ました，ばかばかしい考え」（B51f.）と吐き捨てる。他方，若主人であるジャン領事はこの手紙に気持を動かされ，「何と言っても，私はゴットホルトと同じ善良なキリスト者なんです」（B52）と語り，一族のなかに不協和音があることが将来の禍根になる可能性を危惧して，迷いをあらわにする。この場面は父子の性格の違いを如実にあらわしている。最終的にはジャン領事の緻密な計算で，ゴットホルトの要求に屈してしまえば金銭問題に関する家族の原則が崩れ，商会に大きな損失がもたらされる可能性があることが判明し，領事みずから父の冷徹な判断の正しさを認めて一件落着となる。ジャン領事は結局は商人として健全な才覚をもつことを示したことになるが，しかし，結論に至る逡巡は，信仰が商人として大切な冷徹さと決断力の点において負の作用をなし得る危険性を明らかにしている。

ところで，ヨハン老人は家長として大きな存在感を示しているために家族の気質をも代表するかのように見える。しかし，その無信仰にも見える宗教的態度はむしろ一族の歴史のなかで例外的ではないかと考えられる。今は亡きヨハン老人の父は信心深い言葉を家伝のノートに残していた。ヨハン老人の妻アントワネットについてはフランス系スイスの祖先をもつハンブルクの名門デュシャン家の出自であり，ジュネーブを本拠とする，熱狂的な信仰で知られるカルヴァン派の血筋が考えられる。トーニの最初の夫となる詐欺師グリューンリヒは同じハンブルクの出身で，ジャン領事が母アントワネットに言及したとき，ハンブルクにおけるデュシャン家の名望を讃え，「あのお宅では信仰心や，穏やかな心情，奥深い敬虔，すなわち私の理想である本当のキリスト教精神」（B104）が見られると語って，意中の娘であるトーニの父ジャン領事を喜ばせている。ジャン領事の信心深さは祖父と並んでこの母親から受け継いだものと見ることができる。そして夫とともに家のなかに多くの聖職者を寄寓させ，ブッデンブローク家の声望をルター派とカルヴァン派の牧師たちのあいだで高めることになるジャン領事の妻エリーザベト，さらにはヨハン老人の先妻の息子であるゴットホルトはいずれも篤い信仰の持主である。すでに述べたように，この小説に描かれる四十年あまりの歳月の初期段階，すなわち 19 世紀前半では，プロテスタンティズムの精神はこの宗旨を信仰するドイツの地域において健在であり，いまだ日常の市民生活に浸透していたのである。

『ブッデンブローク』はキリスト教信仰が衰退していく 19 世紀という時代を背景として，ブッデンブロークという上流市民の衰退を描いている。この衰退は生命力と現実的な感覚の衰えが招くものとして捉えられている。第一世代であるヨハン老人が示していた野太い現実的精神は世代を経るごとに衰退し，観念性や芸術への傾倒が増していく。ジャン領事の過度の良心性はそうした流れの発端にもなっている。ジャン領事の敬虔さは一面では弱さから生じており，父親の合理主義的な性向との比較において現実喪失の方向性をもつものとして描かれている。しかし，それでも後続する世代が無信仰に近づき，それとともに心身両面で脆弱になっていくことと対置してみれば，ジャン領事の信仰は精神を支え，その脆弱化を食い止める防壁になって

いる。領事の信仰は一方では弱さのあらわれであるが，他方では生の支柱だった。やがて訪れるブッデンブローク家の没落は，近代という時代の進行がこの一族ではヨハン老人が体現するような啓蒙主義に発する楽天的な進歩主義の拡大ではなく，むしろジャン領事流の不安から発して内面に沈潜し，情感に耽溺するロマン主義の拡大として進行していくところから来ている。しかし，小説の始まりにおけるブッデンブローク家では，ロマン主義的な退嬰の精神はまだジャン領事のなかのわずかな萌芽としてしかその姿を見せていない。家族全体の精神的傾向としては，敬虔なプロテスタント精神がしっかりと息づき，その生活を支えており，そのなかにあってヨハン老人の啓蒙主義者ぶりや信仰の軽視は家長でありながらむしろ例外的現象だったのである。

7. 歴史主義とロマン主義

ブッデンブローク家は敬虔で上品な一族である。資本主義が進展し，経済的な競争が激化すると，良心的な経営にとらわれがちなブッデンブローク家の生き方は生存の上で不利なものになっていく。三代目のトーマスが商会主になり，表向きの信心が影を潜めてもブッデンブローク家の根底にはプロテスタンティズムに根差す道徳的な姿勢があった。これに対して，社会の変化に応じた投機的な商法で成功し，後発の家系ながらブッデンブローク家を脅かす地歩をリューベックの社会で占めていくのはハーゲンシュトレーム家である。フランクフルトのユダヤ人の血筋が入った（B66 und Vgl. Kommentar 1.2-256）ハーゲンシュトレーム家は小説の冒頭の部分，すなわち 1830 年代あたりの時点でリューベックに移ってきた新参者であり，臆面もない商売によって経済的に成功してきた成り上がり者である。ジャン領事はひたすら抜け目のないこの一族を「狐」（B67）と呼び，敵意と嫌悪を人に語っていた。しかし，リューベックにも押し寄せる社会変動のなかで，生命力と適応性に富んだこの一族は衰退していくブッデンブローク家を尻目に隆盛に向かっていく。

ヨハン老人が死去した後のブッデンブローク家でジャン領事やトーマスが主導する商売が不吉な運命に魅入られたように大きな損失を蒙り続けるのに対して，トーマスやトーニの幼馴染であったヘルマン・ハーゲンシュトレームは市の重鎮となり，ついにはブッデンブローク家の繁栄の象徴だったメング通りの屋敷を購入することになる。ブッデンブローク家の衰運は三代目のきょうだいたちの生活にもあらわれていた。トーニは二度にわたって結婚に失敗し，実家に暮していた。トーマスの結婚から生まれた一粒種のハンノーは音楽の才能を示してはいたが，虚弱で活力に欠け，学業も劣等で，後継者としての資質が疑われた。弟のクリスティアンは仕事が長続きせず，放浪に出たり，放蕩に明け暮れる生活だった。他方，ハーゲンシュトレーム家はあらゆる面で上昇過程にあった。ブッデンブロークの将来の家督相続候補が一人だけで，しかもはなはだ心もとない有様であったのに対し，ハーゲンシュトレームの子どもたちは有望

だった。家長であるヘルマンには五人の子どもがおり，そのうちの二人の男の子は荒っぽい餓鬼大将で，闘争心に富み，級友たちに恐れられていたが，人気者でもあった。ヘルマンの弟のモーリッツには四人の子どもがいて，そのうちの二人の男の子はそろって学校で一番の秀才で，級友たちの尊敬を受けていた。（B686）

ブッデンブローク家の人々は世代を追うごとに肉体的にも精神的にも虚弱さを増していく。この傾向は不可逆的で一貫しているが，商人としてなおすぐれた資質をもつジャン領事においてすでに顕在化している。四十代半ばで領事はすでに「目立って年を取ってきていた」（B83）。息子のトーマスが「神経衰弱」になったことについて触れた手紙では，自分もまた若い頃に同様の状態になったことを明らかにしている。（B188）ヨハン老人は，「両足で現在の上に立ち，一族の過去にはたいしてこだわらなかった」（B60）とあるように，今現在を快活に十全に生きていて，家族の伝統や歴史にほとんど興味をもたなかった。他方，領事は非常な伝統主義者で，父があまり関心をもたない先祖伝来の，家族の来歴を記したノートを大切にし，みずからも子どもの誕生や結婚などの折々に主を讃える言葉とともに詳しい報告を書きこんでいた。この歴史への固執もまた，ヨハン老人に比べれば，ジャン領事の生命力が乏しく，なまなましい現実に十分に耐え得ないところから来ている。

しかし，ジャン領事の歴史主義はそれでも信仰に裏打ちされ，その生を市民社会の現実にしっかりつなぎとめていた。ところが，息子トーマスにこの歴史主義が受け継がれたとき，それは信仰という裏打ちを失い，衰退を食いとめるものではなくなっていく。トーマスは永遠と不滅という宗教的な問題については，「自分は先祖たちのうちに生きて来たし，子孫たちのうちに生きていくだろう」（B719）という歴史的な考えを信仰の代わりの支柱とするようになっていた。しかし，この支柱は後継者となるべき一人息子ハンノーの心身の虚弱さへの失望によって大きく揺らぎ出すことになる。信仰を欠いたトーマスの歴史主義は一族の将来が危機にさらされているという認識によって動揺し，生を支え得なくなるのである。

二代目ジャン領事の歴史主義は，19 世紀を彩ったロマン主義のなかにある過去への多大な関心の発露と見ることができる。ヨハン老人とジャン領事の間にある思想的相違は，ヨーロッパの思想史との関係で見ると，18 世紀のルソーやヴォルテール，カントなどの啓蒙主義からノヴァーリスやシュレーゲルなど 19 世紀初頭のロマン主義に時代の思想的主軸が移動していく流れに対応している。もちろん，ブッデンブロークの父子が揃って登場する小説冒頭の場面は 1835 年であり，すでに啓蒙主義の時代ははるか以前である。しかし，1765 年頃の生まれであるヨハン老人の青年時代が啓蒙主義の影響を受けたフランス革命やナポレオンを生んだ時代であったことを考えれば，老人が若い頃に大きな影響を受けた啓蒙主義的な思想をいまだに抱きつづけているということは理解できる。他方，1800 年頃の生まれと推定される[7] ジャン領事が，若年のころに一世を風靡したロマン主義的な思潮にいまだに浸っていることも自然な設定である。もともと民族の伝統に注目し，中世をキリスト教の支配した時代として理想化するロマン

主義は，人間と社会を歴史に規定されたものとして過去を重視し，目を向ける歴史主義につながるものである。おおまかに言って，啓蒙の精神が未来への希望であるとすれば，ロマン主義や歴史主義の精神は未来への不安であり内面や過去に沈潜する精神の姿勢である。[8] 新時代への希望に満ちた理想主義的な啓蒙主義の精神から歴史主義への時代の転換が，積極的で楽天的な商人であるヨハン老人から慎重で内省的なジャン領事への世代交代を表現するものとして扱われているのは，思想史的な流れをうまく作品に取り入れた設定であるといっていいだろう。

父子の思想的相違は転居祝いの際になされる庭園をめぐる談義に如実にあらわれている。ヨハン老人が啓蒙主義の合理性志向にふさわしく幾何学的に構成された人工的なフランス風の庭園を愛好するのに対して，ジャン領事はそのロマン主義的な嗜好にふさわしく理知的・人為的なものを嫌い，イギリス風の自然そのままのような庭園を好む。老人がブルク門の外にあるブッデンブローク家の荒れた庭園を「恥さらし」と呼び，「草を刈り，樹木をボールやさいころのようにきちんと刈りこんだならとても気持のいい場所なのだが」と残念がるのに対して，ジャン領事はそこを散歩するのは快適であり，「もし美しい自由な自然がそんなふうに貧相に刈り込まれてしまったら，何もかもぶちこわしです」（B34）と主張する。人知を信頼する啓蒙主義が幾何学的な安定と調和を重んじる古典主義につながり，みずからの力で未来を切り開いていこうとする積極的な活動欲を生むのに対し，手つかずの自然を好み，そこに平安を見い出すロマン主義は文明に毒される以前の状態として想定される始原的な素朴さへの共感や憧憬につながる。この対話は，いささか図式的に過ぎるかたちで老人の楽天的な啓蒙主義と，息子のいささか退嬰的なロマン主義・歴史主義を対比させている。そして，この世代の変化が目立たないながら生きる活力という観点から見ればすでに退廃であり，没落の予兆であることを示している。

『ブッデンブローク』は一見するとマン自身の家族の歴史をかなり忠実になぞった写実的な小説だが，そのストーリーに影響を与えていると考えられるのは，19 世紀の欧州の文芸思潮において一つの流行となっていた生物学的な退化という理念である。この考え方はダーウィンの『種の起源』（1859）につながるもので，その適者生存，自然淘汰の考え方は 19 世紀末の思想界全体に大きな影響を与えていた。しかし，こうした考え方はダーウィン以前からすでに見られるもので，啓蒙主義的な進歩の理念に対するロマン主義の精神は病や死や廃墟への共感であり，18 世紀のイギリスに発し，フランスやドイツ，さらにはアメリカに引き継がれるゴシック小説の系譜を生んでいく。こうした系譜のなかで，蝕まれ，病んだ血脈というストーリーは，E.T.A. ホフマンやエドガー・アラン・ポー，ジョリス＝カルル・ユイスマンスなどによって書かれ，代表されている。ホフマンは『悪魔の霊薬』（1816）において近親結婚による呪われた血脈を主題化し，ポーは『アッシャー家の崩壊』（1839）において，神経を病んだ家系の末裔の死とその屋敷の崩壊を描き，ユイスマンスは『さかしま』（1884）において近親結婚の繰り返しによって病的な方向に劣化したフランスの貴族の末裔の，ディレッタントとしての生活を詳細に記した。一つの血脈がその盛りを越えると，過度に繊細化し，洗練されることによって生命力が失われ，没

落に向かうというストーリーは19世紀におけるロマン派的な精神が好む主題だった。末裔ハンノーの死によってドイツの都市貴族の家系が終焉を迎える『ブッデンブローク』もまた19世紀のこの文学的系譜につながる小説であり，そのことは小説中のハンノーの親友の作家志望の少年カイ・メルン伯爵が『アッシャー家の崩壊』を愛読していることによって作者自身の手で裏打ちされている。

ブッデンブローク家の歴史は生物学的退化によって衰滅していく一族という理念に忠実に従って進行していく。ヨハン老人の啓蒙主義からジャン領事のロマン主義への変化も，すでにこの生物学的退化という理念に沿ったものであり，生命力の衰退という現象のあらわれとなっている。この大枠のなかに信仰の意義はアンビヴァレントなものとして組み込まれている。『ブッデンブローク』は信仰をジャン領事の場合のように一面では生命力の衰退から生じるものとして描きながら，他方では生命力の衰退を食い止めるものとしても描いている。実際，ジャン領事の代ではトーニの持参金目当ての詐欺師との結婚で財産を掠め取られるなどの失策はあるものの，商会は良心的なやり方でまだ大過なく運営され，ハーゲンシュトレームのように急速な発展はないものの，ともかくも「静かな歩み」（B190）を続けていた。宗教はジャン領事がとらわれがちな生への不安を救うものとして機能していただけでなく，商売上のモラルを裏付けるものとして機能し，信仰の薄い息子のトーマスが後にハーゲンシュトレーム家の繁栄を羨んで真似る冒険主義的な投機のようなことから商会を守っていた。父と同様にトーマスの生を支える中心的な価値は家族の伝統だったが，トーマスにあっては父を何よりも支えていた信仰は薄弱化し，その行動は支離滅裂なものになっていく。

8. トーマス・ブッデンブロークの演技的な生

ブッデンブローク家の生命力の衰退はトーマス以上にその弟クリスティアンにおいて顕著だった。常に心身の不調に拘泥して仕事をおろそかにし，刹那的な快楽に人生を蕩尽するクリスティアンは，『ブッデンブローク』以前の小説でマンが繰り返し描いてきた市民社会のアウトサイダーそのものである。クリスティアンにはトーマスをかろうじて支えていた家族の伝統を固守する歴史主義的姿勢もなく，大海に浮かぶ舵のない船のように寄る辺なく現実のなかに浮遊している。クリスティアンは幼少時から物真似の才能に秀でており，人を笑わせることで座をにぎやかにする人気者だった。すでに小説冒頭の祝宴において，当時7歳のクリスティアンは家族と客たちを前にして学校教師の物真似をして見せるのだが，それは一同の爆笑を呼び，ユーモアのあるヨハン老人を上機嫌にして「猿」と呼ばせる。真面目な優等生である兄トーマスはおよそ人を笑わせる才能は欠けているようで，弟の人気を「妬むようなこともなく心の底から笑っていた」。（B18）優等生のトーマスには物真似などよりももっと大人たちの気に入る社会的有能さの片鱗が明らかだったのである。しかし，商会を引き継いだ当初こそ目覚ましいも

のだったトーマスの有能さは，後年，ジャン領事が恐れたような一族の運命的な衰退が明らかになっていくなかではかつてのようには発揮されなくなっていく。トーマスにおいて次第に優勢になっていったものは，商会を繁栄に導く辣腕ではなく，クリスティアンに通じるような演技的な才能だった。トーマスはその早すぎる晩年において心身の疲労を覆い隠して，闊達さと有能さを演じることにほとんどすべての労力を費やすことになるのである。

ブッデンブローク家の最後の二世代の人々，特にその男たちはそれぞれ程度の差はあるが，それ以前の短篇でマンが描いてきた，市民社会から脱落した種類の人間像にほぼ重なる人々である。なかんずくクリスティアンとトーマスの息子のハンノーは，完全なアウトサイダーの資質を帯びている。作者の説明では，その初期におけるこの小説の構想は，学校における落ちこぼれであり，父親の期待に添うことができずに「一族の歴史の最後の息子になる過敏なハンノーと，それからせいぜいトーマス・ブッデンブロークの物語」[9] という小規模なものだった。ハンノーはその父トーマスと並んで，この家族小説においてもっともその行動と心理が丹念に描かれている人物である。ハンノーは学校では劣等生で落第を繰り返し，不安感のつよい性格だった作者を思わせるキャラクターである。学校に適応できず，ひたすら芸術の世界に救いをもとめて没入するその姿は，作者の伝記に少しでも通じた者であれば即座にその分身であると認定するほどのものである。

しかし，すでに述べたように，この長編小説がマンの創作史においてもっていた画期的な意義は，むしろ小説の前半の健全な市民たちの精細な活写であり，彼らの言動を想像のなかで追体験しながらその生活感覚を作者みずからもまた共有していることの確認だった。このことはそれまでになかった芸術家像をマンが生み出す契機となった。この数年後にマンは『トニオ・クレーガー』を発表するが，そこでは伝統的な北ドイツの都市の基軸を構成する市民性の精神と和解し，社会との接点を保持しながら生きようとする芸術家像がはじめて生まれる。こうした市民精神を内在させた芸術家像は『ブッデンブローク』の執筆によって生まれ，マン自身の生き方の指標となる。ブッデンブローク家のなかでこの市民的芸術家の理念にもっとも近いのは，三代目のトーマスである。トーマスは，大きな商会の経営者として，また市政の中枢を担う参事会員として社会的に重要な身分にありながら周囲から浮き上がった存在として生きている。トーマスは芸術家ではないが，芸術家に似た，現実から遊離した精神をもち，現実の社会を舞台になぞらえ，自分に課せられた仕事を俳優のように演じていく商会経営者である。トーマスの人生に処する姿勢は，身分違いの結婚をしたために廃嫡され，不遇の社会生活を送った伯父ゴットホルトの臨終に立ち会った際の次のような内心の独白に集約的に語られている。

> あまり幸運とはいえなかったね，ゴットホルト伯父さん，・・・（中略）・・・伯父さんには詩のセンスがなかったんだ。父親の命令に反して愛し，結婚するぐらい勇気があったのにね。・・・（中略）・・・伯父さんはこう考えたんだね？　俺は愛するシュテュービング家

の娘と結婚するんだ，実利的な観点なんかどうだっていい。そんなのはつまらないことで俗物根性ってもんだと・・・(中略)・・・だけどこの世ではすべては比喩に過ぎないんだ。ゴットホルト伯父さん！　小さな町でも偉大な人間になれるってことを知らなかったんだね？　バルト海沿岸のそこそこの商業都市であってもシーザーになれるんだということをね？　もちろんそれには若干の想像力，若干の理想主義がなくちゃならない・・・。伯父さんはそれを持っていなかったんだ。(B302f.)

トーマスにとって，現実に自分が暮す小さな町は世界の比喩としての舞台であり，自分はそこでシーザーを演じる俳優であり芸術家だった。トーマスは歴史や文学を愛好し，彼が住む小さな町では並ぶ者のない趣味の持主であることを自負していた。(B673f.) ジャン領事において精神生活の中枢を占めていたのは宗教だったが，その長男トーマスにおいては文学的な想像力の世界が宗教に代わり，自身の生は過去の英雄が送った生の比喩として捉えられることになる。ここには平凡な日常が繰り返される市民的生活をそのままで受け入れることできず，非日常を夢見る芸術的な精神がある。トーマスの芸術家気質は結婚においても発揮され，ひたすら音楽に没頭する妻ゲルダを伴侶に選び，ハンノーという完全に浮世離れした芸術家気質の息子を得ることになる。

9. 市民の芸術化と強欲な資本主義

トーマスは一方では父祖代々の市民精神を継承し，みずからの生活をそれによって律しつつも，他方ではリューベックにおける随一の教養人であって，周囲の平凡な市民たちからは奇異の眼で観察される存在だった。内的な矛盾と商売の不振によって次第に疲弊していく心身の内実を隠し，つよい責任感をもって課せられた現実の役割をこなしていくその姿は，芸術家的な資質と市民的な堅実さの狭間に生きる市民芸術家の生き方に通じている。市民芸術家という概念についてマンは『考察』の中で詳しく記しているが，それによれば，市民芸術家はすぐれてドイツ的な芸術家の類型であり，シュトルム，ケラー，メーリケなどがその代表である。そして，市民芸術家は「市民的な生活態度を芸術という過酷な仕事の厳しい戦いと結合させることによって」(13.1-113)，元来は相容れることが困難な芸術と市民性の結合を実現するパラドクシカルな存在である。芸術家ではないが，トーマスは俳優的な性格をもつ市民であり，内面的には市民社会を舞台と観じ，活力に満ちた有能な市民を演じる俳優として生きている。このパラドクシカルで葛藤に満ちた存在形式は，すでに空想に生きる存在と化した人間が現実への違和感に耐えて現実を生き，みずからに課せられた義務を担っていこうとして形成されたものである。この内面性と義務感こそは表面的には信仰を誇示することのないトーマスにおけるひそかなプロテスタンティズムの形式である。ドイツにおけるプロテスタント地域の内省的で地道な

市民性を支えてきたプロテスタンティズムの倫理性は，すでに信仰を失っているように見えるトーマスの市民精神を内実において支えているのである。

父祖から受け継いだ商会への責務を切実に感じながら，現実に足を踏まえて実務に邁進するためにはすでにあまりにも繊細化し精神的な人間となってしまったトーマスは，おそらくハンノーと並んでマンが作中でもっともつよい感情移入をしながら創造した人物だった。現実のマン家と対比してみると，ブッデンブローク家のなかで世代的にマンに相当するのはハンノーであり，マンの父親であるトーマス・ヨハン・ハインリヒ・マンはトーマス・ブッデンブロークに相当する。しかし，中年で早死にするなどの点でマンの父親をモデルにしながらも，作家マンのファーストネームを与えられ，市民性と芸術的気質のあいだで引き裂かれているトーマス・ブッデンブロークは，生涯を通して芸術と市民性の相克にとらわれつづけたマンの心情を大きく取りこんで創造された人物でもある。

『トニオ・クレーガー』の主人公は音楽少年ハンノーを文学少年に置き換え，生き延びさせたようなキャラクターである。トニオは放恣な芸術家としての生活に倦んで，禁欲的で生真面目な「ピューリタン」気質の持主だった父親の精神態度のなかに自分を市民的生活に引きもどす規範を見い出し，市民芸術家として生きていく道を歩もうと決意する。ちなみにここで父について言われる「ピューリタン」とは，周知のようにスイスのカルヴァン派に起源をもち，英米に広まったプロテスタントであるが，ドイツ国内において圧倒的に優勢だったルター派のプロテスタントよりも概して禁欲的で厳格であることで知られている。[10] トニオが教団としてはルター派に属していたはずの父を「ピューリタン」と呼ぶのは，主としてその禁欲性と厳格ゆえのことであるだろう。この「ピューリタン気質」はトーマス・ブッデンブロークのなかにすでにマンが描きこんだものであり，父がモデルであると同時に自身の似姿でもあるこの人物の創造において，マンはすでに芸術家である自分のなかの市民的プロテスタンティズムをつよく自覚していたといえる。トーマスは市民性と芸術的な気質のあいだで平衡をとることに失敗して失意のうちに死んでいくが，これは市民性から芸術的な段階への移行によって一族が衰退し，滅亡していくという小説の基本的構想に沿ったものである。『トニオ・クレーガー』は同じ中間的存在という観念を，今度は芸術家になった市民の末裔という立場から見直し，その芸術家が自己解体の危機を父祖の市民精神を取り戻す企図によって回避するという自己再生の物語を語っている。

『ブッデンブローク』に描かれるリューベックにおいて，神への信仰に代わる新しい価値として市民社会に登場するものは大別して二つある。一つは市民社会の伝統になじまない新興勢力の強欲な資本主義であり，もう一つは現実逃避的な姿勢をもつ教養や芸術へのディレッタント的な傾斜である。前者はハーゲンシュトレーム家によって代表され，その繁栄は伝統的な市民社会の終焉ないしは変質を物語り，後者はブッデンブローク家の破滅の運命を呼び寄せることになる。ブッデンブローク家にあっては信仰の衰退は一族の終焉につながる。初代ヨハン老人

の根幹をなす啓蒙主義の精神は宗教のなかにまぎれこみがちな迷妄を嫌い，近代科学にもとづく合理的感覚に依拠しようとするものだった。一族の繁栄に大きく貢献したヨハン老人の啓蒙主義的な合理的精神は，すでに述べたように，小説の前半で描かれている限りの一族のなかではむしろ例外的現象であって，老人の父が敬虔な信仰の人であったことを含めて，ブッデンブローク家の基軸となる精神はプロテスタンティズムへの深い帰依であった。しかし，ロマンティシズムや歴史主義に傾きつつもきわめつけの信仰の人だった二代目のジャン領事を経て三代目の当主となるトーマスは，ジャン領事の精神からその信仰の形式的側面をほとんど抜き取った上で，歴史や伝統に固執する精神，事実よりも内面の見えないものに惹かれる傾向を大量に受け継ぐことになる。

トーマスの精神の根幹にはジャン領事から受け継いだ未来への不安があり，その不安ゆえに安定した歴史を築いてきた一族の伝統のなかにみずからの存立の根拠をもとめる。そして，自分とは逆に未来を楽観していたヨハン老人を憧憬する。しかし，ヨハン老人の調和のとれた楽天的な啓蒙主義の精神はすでに時代遅れのものだった。ヨハン老人は現実適応的ではあったが，その実利よりも古典的教養を重視する教育観の点において，19 世紀の実際的な社会を支配しつつあった実利主義から取り残された存在だった。ヨハン老人の仕事は伝統的な市民社会の勤勉さに基づく手堅いものだった。トーマスが生きる 19 世紀中葉において，時代を象徴する精神は，ハーゲンシュトレームに代表される臆面もない資本主義的な実利追求の精神と，ブッデンブロークが体現する，競争が激化する社会を前に立ちつくし，神経症的な不安にとりつかれるロマン主義的な精神に二分化していた。トーマスが主導するブッデンブローク家は，かたちにおいては脱宗教的な方向を示しているものの，良心に恥じない仕事のみをせよと言い残した父祖の精神を受け継ぐ，根底においてプロテスタンティズムの内省的なエートスをもつ一族である。しかし，その内省性は一族の生命力の衰退のなかで過去への執着や現実逃避のかたちをとることになる。

資本主義が進展して利潤の追求が激化した時代においては，ブッデンブローク家のような伝統的で貴族的な市民意識をもつ家系の人々は，その誇りからあくどい金儲けに乗り出すことができず，時代の波に乗り遅れてしまう。他方で，ハーゲンシュトレーム家はユダヤ系の女性との結婚によってフランクフルトの金融業界とつながりを持っており，よく言えば進取の気性に富んだ，悪く言えば臆面もない営利活動によって，新参の身でありながらリューベックの市民社会で勢力を広げていく。この一家はあらゆる面でブッデンブローク家と対照的であり，あらゆる面でブッデンブローク家を圧迫していく。最初にこの一族の名前が語られるのは，リューベックに住みついて間もないヒンリッヒ・ハーゲンシュトレームがジャン領事の政治的な地位を狙っていること，またその商会がブッデンブローク商会の取引を「鼻先でひっさらっていった」（B67）厚かましい所業についてジャン領事が幼いトーニに語る場面だった。

ハーゲンシュトレームの信仰については何の記述もないが，敬虔なキリスト者でないことは

明らかである。拝金主義の家風であることはその娘が幼いトーニとの会話で「私のパパは千ターラー持ってるのよ」（B67）と自慢してトーニを悔しがらせることによっても表現されている。トーニはこの娘ユールヒェンと学校の同級であるが，仲が悪かった。その兄ヘルマンは，おいしそうなレモンパンを餌にトーニに接吻を求めて厚かましく言い寄ったことがある。物欲を隠さず，万事に即物的なハーゲンシュトレーム家の成功は新しい時代の方向を示している。トーマスは妹のトーニと同様にかねてからハーゲンシュトレーム家には好意を持たなかったが，その商法や繁栄には無関心ではいられなかった。父が死んで商売がうまくいかないことに悩んだトーマスは，新時代の傾向に順応することを考え，ブッデンブローク家の堅実な伝統にそぐわない先物取引を逡巡の末に行ない，その挙句偶発的な天災によって大きな損失を蒙る。この青田買いはトーニが勧めたものだった。一族の貴族性に誇りをもつ気位の高いトーニも，かねてハーゲンシュトレームの繁栄に刺激を受けており，それゆえにその誇りに反して昔ならいかがわしいこととしてはねつけたであろうこの取引を耳よりの話として兄に吹き込み，勧めたのである。ハーゲンシュトレーム家の人々を「害虫」（B290）と呼ぶほどまでに忌み嫌うようになっていたトーニは，こういういかがわしい取引はほかの市民はともかく，ヘルマン・ハーゲンシュトレームのような「ペテン師」（B502）なら飛びつくだろうと言っている。しかし，ブッデンブローク家がその伝統にそぐわないこの投機にあえて手を出したことは裏目に出る。嵐によって作物は全滅し，このことはすでに傾きかけていた商会に大きな打撃を与え，一族の没落を加速させることになる。

10. 教養市民層とブッデンブローク家

1826年に生まれたトーマス・ブッデンブロークはドイツ社会の中核部分が重要な変貌を遂げていく時代を生きていくことになる。すなわち，トーマスがその多感な青少年期を送る19世紀中葉において，ドイツにおける社会の覇権は，貴族階級や，商業・手工業にたずさわる都市市民の手を離れ，公共的な職業にたずさわる教養市民層へと移っていく。プロイセンが主導する中央集権的な国民国家形成のなかでドイツの市民社会は大きな変化を蒙る。都市においては，伝統的な自治の精神をもつ誇り高い市民が過去のものとなっていく一方で，ドイツ帝国の官僚体制整備のなかで基本的に大学教育を受け，官吏，聖職者，学者，法律家などの官職についた「教養」ある人々が社会の上層を占めていくことになる。[11] 割拠していた多数の小国がヴィルヘルム帝国へと統一されていく19世紀のドイツのなかでは，「国民文化の担い手」であり，「国民の政治的認識の必然的器官」[12] である人々が教養市民層として社会の中枢になっていく。ドイツに特有の教養市民層の特質は，きわめてドイツ的な伝統としての「社会の現実から離れてひたすら人格の完成を目指す」[13] 教養概念を精神的な基底におきながら，学歴専門職として社会を支配していたという点である。[14] 単に大学出ということではなく，非政治的な内面重視の姿勢

をもち，人文的教養に富んだ上級国民であることが教養市民層の特質である。

教養市民層はドイツ・プロテスタントに特有のものだった。近代ドイツでは，伝統を重んじる保守的なカトリックに比して，プロテスタント教団は後発の新興宗派として開かれた態度をもち，内的省察を重んじたところから，プロテスタントが支配的な地域からは文化的な成果が生まれやすく，その文化的優越は大学においても，文学・芸術においても歴然としていた。[15] ドイツにおいては，多くの学者，詩人，芸術家がプロテスタントの牧師家庭の出身だった。[16] 教養市民層はプロテスタンティズムに一つの起源をもつものでありながら，学問技芸における思想的自由のゆえに教会をとおしての信仰には距離を置くようになる。すなわち，教養市民層においては，「教養信仰」[17] が次第に教会や聖書の信仰に代わっていく。

教養市民層はトーマス・ブッデンブロークが生きた19世紀中葉にその勢力の頂点に達していた。トーマスの運命はこの教養市民層の興隆と大きく関っている。トーマスは教養市民層の一員となる十分な知的能力をもちながら，代々の商会経営者の例にならい，アカデミックな教育を受けることなく，伝統的な商人になるための実業学校で教育を終えてしまった。ハンザ都市の名門の商家であるブッデンブローク家の後継者としては，先祖伝来の生き方を受け継ぐことこそが自明の道であり，大学に行くことは考えられていなかった。少年のころから将来有望な後継者と目されていたトーマスは，父が比較的早くに世を去ったのち，若くして商会の社主となり，その経歴の出だしのころは才能と意欲にあふれた商人として家業を発展させていく。この実績に加え，もともとブッデンブローク家が町で得ていた声望も作用してトーマスは37歳にして市の参事会員に選ばれ，自治の中枢を担うことになる。しかし，野心に富んだトーマスの経歴は参事会員が頂点であり，市長の右腕として力を振るっていたものの，市長そのものになることは阻まれていた。時代の変化が国家や自治体の最上層に参入するための条件として最高学府の学歴を要求するようになったからである。

> 彼はかねてより暇な時間を歴史や文学の読書に費やしていたし，才気においても，また内的および外的な教養においても周囲のすべての人々より自分のほうが優れていると感じていたのだが，決められた資格条件を満たしていないために自分が生まれた小さな王国で一番の地位を占めることができないことに怒りを覚えざるを得なかった。「私たちは本当に馬鹿だったね」と彼は彼の友人で心酔者でもあるシュテファン・キステンマーカーに言った。（B673f.）

出世が限界に達したことは，トーマスの野心と自負心を傷つけ，中年に達してからの癒しがたい鬱屈を構成する一つの要素となる。リューベックという地方都市では誰よりもすぐれた教養を身に着けていると自負するトーマスは，友人に「大学にちゃんと行かなかった」（B674）ことを心底からかこっている。ちなみに『ブッデンブローク』では，表題となっている一族から

その一員となる者が出ないこともあって，教養市民層に属する市民が大きく取り上げられることはない。ブッデンブローク家と対照的に，ハーゲンシュトレーム家からはその興隆を象徴するように教養市民層に参入したり，その予備軍となる子弟が輩出する。ヘルマン・ハーゲンシュトレームの弟であるモーリッツは大学に進み，法律家として開業し，文学さえもわかるというその「教養」がアクセサリーの効果を発揮して「かなりの顧客を獲得した」(B261)。しかし，ブッデンブローク家は大学とは縁がないが，実際は教養市民層に近い内面的な教養をもつ一族だったし，ハーゲンシュトレーム家は大学出を輩出するが，もともと敬虔なプロテスタントの家系ではなく，本格的な教養市民層の内省的な精神にはあまり縁がなかった。

『ブッデンブローク』のなかで教養市民層の予備軍として比較的大きく取り上げられているのは，トーニがはじめての接吻を交した相手だが身分が低いために結婚を許されず，はかなく終わる恋愛の相手だった医学生モルテン・シュヴァルツコップである。モルテンは大学に通っているということで将来の教養市民だが，この小説のなかでは医師という職業は家庭医であるグラーボ博士をはじめとして何人か出てきていても，家族に近いマリア教会の牧師たち同様に本格的な教養市民層の資格要件である人文的教養に富んだ人々として登場することはない。医師は教養市民層の一角をなす職業ではあるが，ブッデンブローク家と関わりをもつ医師たちは一種の職人肌の人々であって，教養人という印象はないし，モルテンも同様である。モルテンは大学生ということで一種の尊敬をトーニから受け，水先案内人の息子という身分違いの青年でありながら恋情の対象になる。しかし，特に人文的教養を示すことはなく，その代わりに上層の階級に対する反感にもとづく社会思想を聞きかじりでトーニに語る素朴で単純な青年である。こうした社会思想もまた，宗教への信仰が衰えていく 19 世紀のドイツで教養とならぶ宗教の代替物として登場したものである。トーニはもともと社会問題などに関心のない，人生を楽しむタイプの娘だが，モルテン青年が社会思想を語る一途な純真さに惹かれ，本気で結婚を願い，父ジャン領事に手紙を書くが，その際，貧しい庶民の出だがモルテンが大学生であって，父が望む富裕な商人ではないものの，「商人とはまた別の名誉ある紳士たち，つまり学者の一員」(B159) であることを強調している。モルテンの社会思想は当時の流行を反映したものに過ぎないだろうが，これはやがて 1848 年の革命騒ぎにつながり，この小説の舞台である小さな町でも普通選挙権などを求める労働者の運動となってあらわれる。(B193ff.) モルテンは宗教の衰退によって教養・芸術という代替物や拝金主義という代替物があらわれてくる 19 世紀のなかで，もう一つの信仰の代替物である革命思想を奉じている。

ちなみに医師ということで言えば，ブッデンブローク家はグラーボ医師というかかりつけの家庭医をもっている。この医師は小説の冒頭から終盤でラングハルス医師に後継を委ねるまでずっとブッデンブローク家と密接な関係を持っていて，一族の人々の臨終や日々の健康の問題に際して登場する。この医師はトーニによれば「心やさしく，朴訥で，本当に手堅い」のだが，しかし，まったく魂の問題や社会問題などにはかかわらない，いわば散文的な市民であって，

トーニは彼について，医者として「あまり立派だとは思わない」（B510）と語っている。この医師は政治的なことにまったく関心がなく，「いつも長い温和な顔をして」，そのときどきに十年一日のごとき処方をするだけだと言って，その即物的な専門家ぶりを批判するのである。トーニはこれだけ言ったあとで，「まったく違うお医者さんだっているわ」（B511）と語っているが，ここにはモルテン青年の面影が垣間見えると言っていいだろう。トーニは不運が続いたその人生行路のなかでしばしばモルテンを想起し，その人柄を偲ぶ。当時の階層意識からすればほとんど考えられないことだっただろうが，ジャン領事が牧師の息子である詐欺師グリューンリヒとの結婚を勧めず，庶民の出ではあるが教養市民層に連なるモルテンとの結婚を認めていたなら，トーニは現実にそうなった人生よりはより満足のいく人生を送れたかもしれない。

大学には行かなかったものの，外国語で小説を読み，周囲の平凡な市民からすれば理解しがたい複雑な内面と洗練された教養をもつトーマスの精神的特質は多くの点で教養市民層のそれと重なっている。国家の上層に位置するこの人々は一般庶民の信仰については，軽侮をもって無知な事大主義とみなし，距離をおいた態度でこれに対していた。通り一遍の教会との付き合いしか持たず，市民社会の真っただ中で生きながら，そこから浮き上がっていたトーマスは，教養市民層にふさわしい教養を持ちながら大学出身ではないために，そうした交友の輪に入ることもなく孤立していた。死の接近を感じて救いをもとめるトーマスは，偶然手にとったショーペンハウアーの哲学に魂の不滅であることを教えられて，いったんは救いを見い出す。しかし，解脱と観照を説くその高踏的な哲学はあまりにも彼の市民的日常から離れたところにあった。トーマスが大学出であり，本格的に教養市民層の人脈につながっていれば，ショーペンハウアー哲学について十全に話し合うことのできる相手を見い出し，心休まる時間をもつことができたかもしれない。ショーペンハウアーの読書体験はトーマスに至福の一夜をもたらし，本格的な哲学研究を決意させた。しかし，翌朝になると市民としての常識がよみがえり，市の参事会員で立派な会社の社主である自分がそんなことをすれば，「奇妙で滑稽な役割を演じるのではないかという恐怖」（B727）に駆られて彼はその計画を放棄する。プリングスハイム牧師を訪ねて死後の魂の行方について忠告と慰藉をもとめようと思うが，「最後の瞬間に至って滑稽に見えるのを恐れて取りやめた」（B728）。トーマスは家族のなかですら共有できる話題もなく，孤立していた。文学についてはいっぱしの趣味をもっていたが，妻や息子が夢中になっている音楽については没趣味で，相手にされなかった。トーマスは息子が繊弱に育っていることを内心受け入れられず，あらためて息子の将来の姿として夢想するのは「頭がよく，朗らかで，単純で，ユーモアがあって，強靭だった」（B574）ヨハン老人だった。啓蒙主義者で古典教育の擁護者でありながら旺盛な生活力を持ち，あたかも市民の王道を生きたかのような祖父こそが，家庭にも社会にも居場所をもたないトーマスの理想だった。

トーマスは自分が大学に進まなかったことを後悔していたので，もし「息子が二人いたら下の子はギムナジウムを卒業させ，大学に行かせたい」（B683）と思っていたし，できれば一人息

子のハンノーも大学への進学コースであるギムナジウムに行かせたいという気持を持っていた。しかし，ハンノーは成績不良で実業学校に進まざるを得なかった。ブッデンブローク家は最後まで大学と無縁の状況下で，すなわち教養市民層になりおおせることなく没落する。ブッデンブローク家の教養と芸術は市民的生活と両立せず，結局は没落の一つの要因となってしまうが，それはあらかじめ没落の物語として設定されたこの小説の構想によるものである。たとえばもしハンノーがもっとつよい生命力を持つ少年として設定され，生き延びてその才能を開花させることがあったなら，小説はまったく別の展開をすることになっただろう。ハンノーの生涯は市民的一族から教養と芸術の一族への転換をもたらすものとなり，一族の新たな歴史がそこから始まる物語が形成されただろう。

ブッデンブローク家はすでに初代のヨハン老人において信仰よりも啓蒙主義的理性と古典的教養を重視する精神を示していた。老人には音楽の趣味もあって，「時にはフルートを吹いて楽しんでいたものだった」。（B559）これはその後の一族の教養を重視する精神的態度の基盤をなしている。二代目のジャン領事はヨハン老人のような古典的教養の信奉者ではないが，その歴史主義とロマン主義はプロテスタント的な内面性の重視にむすびついており，教養主義への傾斜を示すものである。トーマスの弟のクリスティアンは大学への進学コースであるギムナジウムに行かされており，もともとは大学に進む道が用意されていた。子ども時代から実際的な方面に不向きであることが明らかだったクリスティアンについては，小説冒頭の祝宴でもヨハン老人から「詩人にでもしたらどうかな？」と言われ，一家の友人からは「この子は大学へ進むんじゃないかな。才気があって，ブリリアントだ」（B17）と評されていた。しかし，根気のない性格ゆえにクリスティアンは大学に進まなかった。そしてハンノーは音楽の才能があったが，勉学には不向きで，大学に進むにはあまりに成績不良だった。最後の二世代においてブッデンブローク家の男たちはそれぞれに教養や才気，芸術への素養という点で傑出していたにもかかわらず，ついに誰一人，新時代の主役というべき大学出の教養市民層の一員になることがなかった。

内面性に富み，教養のある一族でありながらブッデンブローク家が教養市民層に参入することに失敗したのと対照的に，すべてに実利的で本質的には内面的な教養には乏しいハーゲンシュトレーム家は，家長ヘルマンの弟モーリッツが大学に進み，法律家となることで教養市民層の一角に食い込み，経済的な面での繁栄だけでなく，知的な面でもひとかどの一族として一目おかれることになる。すべての面において，下降するブッデンブローク家と上昇するハーゲンシュトレーム家は対照的だった。

11.『トニオ・クレーガー』の市民とトーニ・ブッデンブローク

『ブッデンブローク』の少しあとに書かれた『トニオ・クレーガー』には，平凡な市民的精神

の象徴として少年ハンス・ハンゼンや少女インゲボルク・ホルムが登場し，文学少年である主人公トニオのイローニッシュな憧憬の対象となる。ハンスやインゲボルクは階層的にはトニオと同様に上流の市民だが，現実を疑わず，市民社会に適応した精神のありようにおいて，悩み多く迷える精神であるトニオが自分の対極的存在として羨望し，愛する存在である。ブッデンブロークの一族のなかにこうした平凡な市民的精神を求めるとすれば，それは誰よりもこの小説で語られる42年間の歳月を最初から最後まで生き通すトーニであるだろう。ヨハン老人も健全な市民精神であり，決してエクセントリックにならない良識をもった人物だが，社会人としても家長としても大きな存在感をもち，小さな町が持ちうる限りの「偉大さ」を備えた人物に対して「平凡」という言葉はあたらない。トーニは兄から「お前はほんとに子どもだよ」(B422)と評される素朴なキャラクターである。苦労の多い生涯を送りながらも苦労が身につかず，いつまでも若い外見を保っている。どんな悲しみに際会しても，トーニは人前もはばからず大声で泣くことで洗い流してしまうことができた。子ども時代から住みつづけたブッデンブローク家の広壮な屋敷が，商会の不振ゆえに憎むべきハーゲンシュトレームに売り払われたことはトーニにとって最大級の悲しみだった。トーニはその屋敷の前を通るごとに泣いた。

> それはいつもの全然ためらうことのない，すっきりした気分にしてくれる子どもの泣き方だった。人生のあらゆる嵐にも難破にも彼女に忠実に奉仕してくれたあの泣き方であった。(B671)

半世紀に近いブッデンブローク家の運命をトーニはその一員として最後まで体験し，平凡な女性らしい明朗さをもって生き抜いていく。世代を追うごとに繊細化し，芸術的な気質を増していく一族の苦しみに満ちた没落のなかで，トーニの楽天的で素朴な市民性が常にそこに介在していることは作品の陰鬱さを軽減している。トーニは精神性を欠いた現実密着型の人間のように見えるが，その実，家族という観念を生きる一種の信仰者である。脱宗教が進むブッデンブローク家の第三世代のなかで，トーニもまた宗教的な信仰は薄い。もともと人生を楽しむことができる素朴で楽天的な気質を備えたトーニには，不安感のつよい父ジャン領事が抱いていたような宗教への思い入れはない。父を愛していたトーニは父の生真面目な敬虔さを，宗教においてではなく，家族の歴史への信仰というかたちで受け継ぎ，それを精神の支柱として生きていく。もともと本能的に嫌悪していたグリューンリヒとの結婚を牧師の息子であるという理由や経済的な理由から父が勧めるのに反発していたのに，その意に染まない結婚をトーニが承諾したのは，父の手紙のなかにあった「私たちはばらばらに切り離され，個々に息づく別個の存在ではなく，それぞれが一つの連鎖体のメンバーなのです」(B160) という言葉が決め手となってのことだった。伝統ある家族の一員であるという責任感がトーニに個人的には嫌悪の対象でしかない男との結婚を決意させるのである。二度の結婚に失敗し，実家に戻ってからのトー

ニは，一族の繁栄を望むあまり，その将来を担う者としてのハンノーに夢を託すようになる。その虚弱さや劣等生ぶり，気おくれのする性格などには目をつぶり，現実離れのした期待を寄せるのである。「非常に冷たい」（B709）人柄の母親ゲルダよりもハンノーを愛し，ハンノーが8歳の誕生日に自作自演でピアノの腕前を披露すれば，「この子はモーツァルトのようになるわ」（B558）と狂喜する。兄トーマスが死んだあとは，ハンノーがヨハン老人のような辣腕の事業家になり，「一族を新たな繁栄に導く」（B767）とありそうもないことを思い，みずからを慰める。トーニはヨハン老人と楽天性や素朴さを共有しながら，その現実遊離性において利にさとい商人である祖父から隔たっており，一種の牧歌的なキャラクターである。この現実的な存在ではないという点は，トニオ・クレーガーが愛するハンスやインゲも同様である。これらの精神性と無縁の市民的人間像も，現実適応のよい存在として提示されながら，その実，トニオの憧憬が生む幻影の要素を帯びた牧歌的な存在である。トニオはハンスやインゲボルクのような単純で幸福な「市民」について，女友だちのリザヴェータに言う。

> 人生を繊細や，憂愁といった，文学の病的な貴族性全体の味方に引きこもうとするのは理にかなわないことです。現在の世界では芸術の領域が拡大し，健康と無垢の領域は縮小しつつあります。残っているものは心をこめて保存すべきですし，瞬間写真のついている馬の本のほうを読むほうがはるかにいい人々を詩の世界に引きこもうとするようなことはすべきでないのですよ！（B279）

ブッデンブロークという市民の一族は芸術家気質の増大によって没落するが，芸術家となって生き延びることができたトニオは，その放埒さや神経過敏こそが彼が生きる時代の支配的な精神であるという認識に立ち，健康で無垢な市民のほうが絶滅危惧種であると断じてその保存を考える。芸術が滅亡に通じる道だった『ブッデンブローク』の主導理念は『トニオ・クレーガー』では反転し，芸術は時代を支配するものと考えられることになり，トーニやハンスやインゲボルクのような単純で安定した市民こそが滅亡に瀕したいたわるべき存在となるのである。

12. 聖職者の生態とニーチェのキリスト教批判

聖職者については，この小説はその生態をほとんど否定的に描いている。トーニの最初の夫で，持参金を目当てに結婚を目論んだことが後に明らかになるグリューンリヒは，自身は商人だが牧師の息子で，それゆえにジャン領事の信頼と好意を獲得していた。率直な性質のトーニは，すでに述べたように巧言令色風の態度が透けてみえるグリューンリヒをもともと本能的に毛嫌いしていたし，そのころ知り合ったモルテンという医学生に好意と尊敬を抱き，ひそかな

結婚の約束すらしていた。しかし，ジャン領事はお気に入りのグリューンリヒの，トーニに拒絶されれば自殺するという狂言芝居にだまされて同情し，キリスト教徒として一人の人間が自分のために自殺するのを見殺しにすれば「いずれは至高の裁き手によって責めを負わされることになる」（B160）とトーニを追い詰め，因果を含めてしまう。領事の信心は判断を狂わせ，大切な娘の人生を破壊するものになっている。

領事夫妻の信心は晩年になっていや増し，メング通りの屋敷には以前よりも多くの聖職者たちが快適な宿泊所として国の内外から訪れるようになっていた。夫となったグリューンリヒの破産で離婚し，実家に戻ったトーニは，「何度かの滋養たっぷりの食事や，神聖な目的のための金属的な妙なる音のする援助を心に思い描いて」（B264）訪ねてくる遠方からの聖職者たち，そして町の伝導師たちの魂胆を見抜き，あからさまに憤り，嘲笑していた。そうした聖職者の一人としてブッデンブローク家に到来したリガ出身の牧師ティーブルツィウスは，すでに物故していた父ジャンの敬虔を受け継いだ次女クララに目をつけ，その母に取り入って結婚する。クララはトーマスなどブッデンブローク家の第三世代のなかでは例外的に父の信心深さを受け継ぎ，世俗のことにほとんど関心をもたない陰気な娘だった。「きつい感じの独特の美しさ」（B311）をもってはいたが恋愛沙汰にはあまり縁のない娘で，聖職者との結婚は唯一彼女にふさわしく思われる結婚だった。クララは子を成すこともなく，脳結核とおぼしき（B471）病気で早世する。ブッデンブロークの第三世代の四人のきょうだいから生まれた子どもは，トーマスの息子の虚弱なハンノーとトーニの娘エーリカの二人だけで，一族の生命力の衰退はこの点にも顕著にあらわれている。クララの夫ティーブルツィウスはクララが早世すると打算的な本性をむきだしにして，その遺産をまんまとかすめとり，ブッデンブローク家に大きな損失を与える。

メング通りの屋敷は「ルター派や改革派の聖職者たちや国内外の伝道の世界ではずいぶん以前からもてなしのいい港として知られて」（B264）いたが，この快適な家を利用する聖職者たちの行状は家庭のある身で出戻りのトーニに言い寄るなど聖職にあるまじき卑しさを露呈している。（B265）またブッデンブローク家と密接な関係にあるマリア教会の牧師たちは，ブッデンブローク家の当主たちが代わるのとそれぞれほぼ時期を同じくして代替わりするが，初代のヨハン老人とヴンダーリヒ牧師はすでに見たように気の合う対を形成していたし，その次のケリング牧師は粗野な男ながら，老人の死後に傾きだしたブッデンブローク家とまだ良好な関係を結んでいた。しかし，その次のプリングスハイム牧師はトーマスが死に，クリスティアンが精神病院に収容され，今は没落が目に見えてきたブッデンブローク家に対して非常に冷淡な姿勢を見せるようになり，ハンノーについて「どうにもならない。堕落した一家の出だから」（B820）と吐き捨てるように語るのである。路上で昏倒し，絶望のうちに死んでいったトーマスを看取ったのは冷たい俗物というべきこの牧師であり，チフスで死亡したハンノーはこの牧師のあまり本気とは思えない「祝福を十分に与えられて」（B833）葬られるのである。

マンが描く聖職者の姿には清廉な信仰者の面影はなく，平均以上の現世的欲望を僧服のうち

に隠し持つ俗物の姿があるばかりである。小説の全編を貫くこうした聖職者の辛辣な描き方は，マン自身の経験にもとづく部分があるだろうが，同時代のドイツに顕著になってきていた脱宗教化のあらわれでもあるだろう。とりわけ，マンがこの小説を執筆していた1900年に死んだニーチェのキリスト教批判に代表される時代の思想界の影響を推測させる。マンはすでに19歳のときにニーチェのワーグナー批判を読み，感銘を受けていたというが，兄ハインリヒの影響もあって早くからニーチェへの関心はつよく，生涯をとおして傾倒していた。[18] 牧師の息子で大学人だったニーチェは一面では教養市民層の中核に位置する知識人であり，そのキリスト教批判は教養市民層の脱宗教化の極点に位置するものだった。ニーチェのキリスト教批判は特に聖職者のありように向けられていた。ニーチェは愛や同情を説くキリスト教道徳はこの世の支配者である強者に対する無力な弱者のルサンチマンから生まれたものであり，劣等な弱者の精神が強者の力による支配を転覆しようとして案出した狡猾な戦略であるという。

> 僧侶たちは敵として最悪の者である。・・・(中略)・・・僧侶たちはその無力ゆえに，その内なる憎悪はけたはずれの不気味なものに，極度に精神的で有毒なものにまで成長する。世界史においてもっとも憎悪に満ちた者たちはつねに僧侶たちだった。もっとも狡知に長けた憎悪者もまた僧侶たちだった。[19]

聖職者の一族に生まれ，厳格に育てられたニーチェのキリスト教会への憎悪は激烈だった。『ブッデンブローク』に描かれた聖職者たちの浅ましい生態は，キリスト教道徳の根本に権力への俗悪で卑屈な嫉妬と渇望を見たニーチェの思想に呼応するものである。教会が説く道徳を欺瞞ととらえ，その呪縛から人間を解放することを生涯の課題として追求したニーチェの問題意識は，トーマス・マンの聖職者像にも少なからぬ影響を与えていると考えていいだろう。

13. ゼゼミ・ヴァイヒブロートの信仰と教養人

ジャン領事の不安に裏打ちされた信心は，陽気なヨハン老人を基準にすれば神経症的兆候と見なされうるものだが，衰退していったその後の一族の歴史から顧みるならば，むしろ精神を瓦解から守る砦だった。その敬虔さは四人の子どものなかでは，娘たちのほうに，特にすでに述べたように末っ子のクララにつよく受け継がれている。長女のトーニはクララとは違って社交的で世俗的な娘だったが，そのお転婆な気質を心配した父によってプロテスタントの寄宿学校に入れられ，校長である信心深い女性教師ゼゼミ・ヴァイヒブロートの影響をつよく受ける。トーニは特に信心深くはなく，大人になってからは聖職者たちの偽善を激しく嫌悪するようになった。しかし，上流の子女ばかりを集めた寄宿学校では信心深いゼゼミに大事にされ，幸福な少女時代を送ることができた。ゼゼミは家族外の存在であるが，トーニやトーニの同級でトー

マスと結婚することになるゲルダという教え子を介して特別な関係をこの一家と結び，ブッデンブローク家の冠婚葬祭には必ずゼゼミがそこに居合わせるほどであった。(B447ff.) トーニとゼゼミとの関係は特別に深いものではないが，トーニをプロテスタンティズムの精神につなぎとめるものだった。

ゼゼミは，この小説における信仰の扱われ方を考える上で重要な存在になっている。全編をとおして，ゼゼミ・ヴァイヒブロートは信仰が生にモラルをもたらし，生を破綻から救う働きを示しているもっとも明白な例である。作者は一方で聖職者たちの悪しき生態を繰り返し描きながら，他方では信仰がもたらす肯定的な作用をこのゼゼミの場合において描いている。ゼゼミは背骨の形成不全という身体的障害ゆえにこの世の女性の一般的幸福を断念している。その信仰は子ども時代からのものであり，彼女は「いつかあの世において現世の困難でぱっとしない人生の償いをしてもらえるという確信」(B93) を抱いて生きてきた。ゼゼミの生は信仰によって支えられ，その精神は強靭化されている。信仰に支えられた努力によって，ゼゼミは来世で報われる以前，すでに現世において相応の祝福を受けていた。すなわち，寄宿学校の校長という高い社会的地位に登っており，生徒や市民から尊敬されていたのである。「あまりにも善良で節度があった」(262) と評されるゼゼミの生は，この世においてすでに幸福なものになっている。ゼゼミの信仰は時代の転変を越えて一貫して保たれ，信仰が衰退していく時代の流れのなかであたかも旧時代の遺物のように生き延びていく。ゼゼミは総じて滑稽な人物として描かれているが，信仰が人間の精神を強化し，この世の生を賢明に生き延びさせるものであり得ることを体現する存在である。

『ブッデンブローク』は幼いトーニによる教理問答の暗誦によって始まるが，一族の男たちが絶えたその終結部もまた教理問答のなかの言葉で終わる。その言葉を発するのは，ブッデンブローク家の有為転変を一貫して見守ってきた75歳のゼゼミである。ゼゼミの言葉はブッデンブローク家の歴史を継ぐ最後の男子であるハンノーの死の半年後，今は女性ばかりになったブッデンブローク家の人々がゲルダのアムステルダムへの帰郷を見送る集まりで発せられる。寂寥に堪えないトーニは死んだ兄トーマスやハンノーと天上で会えることを願うが，長年の不運によって以前ほど楽天的ではなくなり，その実現を信じられなくなっている。トーニは「人生というのは私たちのうちにある多くのものを破壊していくのよ，あれやこれやの信仰をぼろぼろにして……」と嘆き，「天国での再会・・・そんなことってあるかしら」(B836) と神を疑う言葉を口にする。そのとき，ゼゼミは断固として立ち上がる。

> ゼゼミ・ヴァイヒブロートは出来る限り背を伸びあがらせ，テーブルの前に立ち上がった。爪先立ちになって首筋を延ばし，テーブルを叩いた。それで頭にかぶった縁なし帽が震えた。
>
> 「あるのです！」と彼女は全身の力をこめて言い，挑発的に全員を見た。

彼女はそこに立っていた。教育者的理性からの異議という誘惑に抗し，生涯をとおして遂行してきた善なる戦いの勝者として，背中が曲がったちっぽけな姿で，確信に震えながら立っていた。小さな，峻厳で熱狂的な女預言者であった。（B836f.）

天国の存在を疑うトーニの言葉に対して，ゼゼミは断固として「あるのです！」と語る。実はゼゼミの言葉はトーニが今しがた発した言葉への応答であるだけでなく，巨視的な視点から見れば，小説の冒頭でトーニが発した「それは何でしょう？」という教理問答の文句に長い歳月を経て応答するものにもなっている。小説は教理問答の言葉によって始まり，トーニの恩師であるゼゼミ・ヴァイヒブロートの「あるのです！」という同じ教理問答中の言葉によって締めくくられる。（Kommentar, 1.2-837）繁栄の盛りから男の後継者が絶えるその終焉までの一族の，四十年余りの歴史は教義問答の言葉をもって始まり，締めくくられるのである。ブッデンブローク家の男たちが代を重ねるごとに繊細化し，生きることへの素朴な適性を失っていった経緯を語る小説がゼゼミの素朴な信仰の表白で終わる結末には皮肉な諧謔の味わいとともに多少の救いがこもっている。確信に満ちたその言葉は，小躯を伸びあがらせるゼゼミの滑稽な動作を伴って発せられる。ジャン領事の信仰が不安や生命力の衰退による翳りを帯びていたのに対して，ゼゼミの信仰はひたすら強い精神力と明朗な精神を生み出している。ゼゼミが一貫してその精神力を維持しえた理由については，生来の資質や環境などさまざまな要因が絡んでいるだろうが，作品に描かれている限りでは明らかでない。作者はゼゼミの精神力をひたすらその堅い信仰に結びつけて描いている。

ところで，『ブッデンブローク』以前のマンの初期作品のなかにはゼゼミとの関連で注目すべき主人公がいる。ゼゼミと同じように背骨の形成不全という障害をもつヨハネス・フリーデマンである。短編『小さなフリーデマン氏』の主人公であるこの男は，その障害のゆえに恋愛や結婚をあきらめている。芸術や読書に救いを求め，決して目立つことはないが，地方都市随一の教養人として孤独で穏やかな人生を送ろうとしているのである。ところがある有夫の女性との出会いはこの静観主義者の心をかき乱し，性的衝動の予期せぬ氾濫に引きずりこんでいく。苦悩の果てに求愛し，手厳しく拒絶されたフリーデマン氏はみずから死を選ぶ。同様の障害を持つゼゼミのようには不幸に打ち克つことができず，破滅していったのである。

性別こそ異なるが，ゼゼミは信仰によって破滅への誘惑から身を守り，生き延びることができたフリーデマン氏である。初期短編の主人公たちがおしなべてそうであるように，フリーデマン氏は社会的異端者であることに怯えていた青年マンの分身的存在である。本論冒頭で述べたように，初期短編の主人公たちは信仰とほぼ無縁の生き方をしており，中心的価値を失って浮遊する精神になっていた。『道化者』の主人公やフリーデマン氏は，一時は趣味と教養のなかに満足を見い出すが，最終的にその快楽主義的ともいえる生き方は現実の厳しさの前に破綻する。他方で，ゼゼミは障害ゆえに異端者の要素を持ちながら，信仰に裏打ちされた強靭な精神

で逆境に打ち克ち，社会のなかに確固とした地歩を占めるに至った人物である。ゼゼミは滑稽に描かれてはいるが，清廉な人物であることは，偽善的な聖職者を徹底的に嫌うトーニの信頼を得ていることからも明らかである。ゼゼミは，プロテスタンティズムが衰退の過程にあってもなお市民生活のなかで息づいていた時代のなかで成長してきたマンが，信仰の一つの可能性を集約して描いたキャラクターである。

マンの生涯は生への不適合感との闘いだった。フリーデマン氏と同様にゼゼミはマンの不適合感をその身体的障害をもって体現する分身的要素を帯びているが，前者とは違って曲がりなりにも生きることへの希望を伝える分身である。フリーデマン氏には神への信仰に代わるものとして教養への信仰があったが，それは現実の荒波に対する抵抗力になり得なかった。『ブッデンブローク』においても，町一番の文学的趣味をもつ教養人トーマス･ブッデンブロークや，芸術的な資質をもつクリスティアン，そして芸術家気質の化身ともいえるハンノーは厳しい現実に敗れていった。これらの主役もしくは主役級の人物に比べると，ゼゼミは完全な脇役であり，作品のなかでの取り扱いは圧倒的に軽微である。このことは，作者の精神におけるゼゼミ的な要素が比較的軽微であることを反映しているだろう。初期短編はいわずもがな，『ブッデンブローク』においても圧倒的に支配的な問題は，時代の進展とともに拡大する芸術家気質の危うさであり，生への不適合である。しかし，こうした問題設定のなかにあって，ゼゼミは近代的な理性が優勢になる時代に抗して信仰を固守しつづけ，その信仰によってブッデンブローク家の物語の最後に「勝利者」であることを示している。

ゼゼミの信仰への思いが滑稽でありながらも力強く表現される結末は，『ブッデンブローク』の作者の，信仰に距離を置きながらも一定の畏敬を含んだ態度を表現している。その勝利は目立たない脇役のものではあるが，物語の最後に置かれていることは，決して軽視されるべきものではないことを意味している。同時に，この姿勢は宗教に対するマンの生涯の関わり方を予示している。マンはこの作品以降も多くの作品のなかで宗教，特にプロテスタンティズムを自身の精神に深く関わるものとして取り上げ，探究していくことになる。

14. カイ少年とトニオ・クレーガー

『ブッデンブローク』はその結末に近い部分において，ゼゼミの勝利とともに目立たないが看過すべきではない別の一つの要素によっていくばくかの明るさを示している。しかもそれは，ゼゼミのようなほとんど過去の人間のものと違って，将来のある少年が示す明るさである。ハンノーの死後半年がたった。その母親であるゲルダは，最後までなじむことのなかったリューベックを引き払い，アムステルダムに戻ることになる。その送別会に集まった女性たちは，そこですでに人事不省だった臨終のハンノーにまつわるある強烈なエピソードを思い出し，語るのである。

この小さな，みすぼらしい恰好の伯爵がやって来たのだった。彼はほとんど暴力をもって病室への道を突き進んできたのだ……。ハンノーはすでにほかの誰も見分けられなかったのに，カイの声を聞いて微笑した。そしてカイはいつまでも彼の手に接吻しつづけたのだった。

「ハンノーの手にキッスしたの？」とブッデンブローク家の婦人たちは尋ねた。

「そう，何度も何度も」

一同はしばらくの間，考えこんでいた。(B836)

カイはハンノーのつらい不適応な学校生活における唯一の友人であり，ほとんど同性愛的な友情によって堅く結ばれた同志だった。二人を結びつけるものは没落する一族の末裔であるという事情もあるが，また芸術的な気質を共有しているという事実だった。しかし，二人を隔てるものは，生命力の差である。ハンノーが次第に衰退していく一族のなかで極点というべき生命力の欠如を示しているのに対して，カイはすでに没落した一族のなかから生まれ出た復活の徴のような活力をもった少年である。ハンノーの死には病原体の感染という物理的な理由だけではなく，カイに向かって「僕は死にたいよ」(B819) と打ち明けたような死の願望が関与していた。ハンノーがチフスで死んでいく過程を記した病理学的な叙述のあとで，語り手はこの病の性格について，病人が生への意欲を持っているならば彼はこの病気を克服して生きるし，病人が生からの呼びかけに「恐怖と嫌悪」をもつならば「彼は死ぬであろう」(B832) と記している。この考え方からすれば，もともと生への意欲に欠けていたハンノーは，その内実においてひそかな自死を選んだということになる。

他方で，ハンノーの病床に制止を振り切って突進し，感染の危険も顧みることなく無数の接吻を浴びせたカイには，障害を乗り越え，未来を切り開いていくつよい意志と活力が示唆されている。ハンノーと友情を結ぶようになってからカイはハンノーの世話係であるイーダに童話を読んでもらうようになり，それがきっかけで自分でものを書くようになっていた。最近ではその創作はずいぶん発展し，「むこうみずな空想にあふれた冒険」(B794) の物語を「繊細な情熱のこもった，内面的で濃縮された，ちょっぴりオーヴァーで憧れに満ちた言葉」(B795) で書いていた。カイは，すでに将来性のある物語作者になっていたのである。もともと貧しい暮らしのなかで母もなく，ほとんど身の回りの世話を受けることもない悪条件のなかで育ったカイには，かえって自力で運命を切り開いていく野性的な力が備わっている。

ハンノーとカイの交友は小説が終わりに近づくにつれて比重を増し，ハンノー臨終の場面において究極の友情のしるしが示されるに至っている。二人は芸術への傾斜によって堅い同盟を結んでいたが，一方は死への誘惑という芸術の危険を体現する存在であり，他方は自由で奔放な活力を生むものとしての芸術の可能性を体現している。ハンノーは芸術化し，没落する一族

の宿命を完成させる者として，生からの呼びかけを拒否し，死を選んだ。しかし，最期の瞬間にハンノーはカイの熱烈な愛情の表現に対して，それまでは人事不省の状態にありながら突然覚醒し，微笑をもって応えた。奇跡のようなこの覚醒は，圧倒的な愛情のこもったカイの力強い呼びかけによって生じたものである。二人の友情は芸術家気質がこの世においてもつ宿命である周囲からの孤立を核心として成立したものだった。ハンノーの死によってこの同盟は終焉を迎えるが，カイの愛情あふれる行動とハンノーが見せた微笑はこの悲劇にいくばくかの明るい色彩を与えている。ハンノーがこの世で成し得なかった一つの課題，つまり芸術家気質を持ちながら生きていくという一つの難事をカイは成し遂げることになるだろう。

ゼゼミの生涯は，生を支えるものとしての宗教がもつ力を示している。フリーデマン氏との対比において，あるいはブッデンブローク家の第三世代以降の男たちとの対比において，ゼゼミの信仰の勝利は教養や芸術に対する宗教の優位性を物語っているようにも見える。しかし，ゼゼミの言動に一貫して付与されている滑稽さは，信仰に対する作者の距離を物語ってもいる。この距離は，ジャン領事の信仰がしばしば大きな判断の誤りを生んでいた次第を描く冷徹な筆致にもあらわれていた。高齢なゼゼミはジャン領事とあまり変わらない世代に属していてすでに過去の人になろうとしている。[20] ブッデンブローク家においてはすでに信仰の時代は終わっている。そのように考えると，ブッデンブローク家の没落を越えて生き延びるものは，ゼゼミの信仰よりもむしろカイ少年が進もうとしている芸術への力強い意欲の側にある。

その大筋において『ブッデンブローク』は芸術の危険性を語る小説である。ブッデンブローク家において，芸術は教養と並んで信仰に代わる価値として次第に大きな位置を占めていった。しかし，この家族において芸術は生命力と現実対応能力を奪い，没落を招くものであったし，教養は生を活性化するものではなかった。しかし，ハンノーの無二の親友であり，よりつよい生命力を付与されたハンノーともいえるカイ少年は，その野性的な活力と闊達さによって芸術の危険性に耐えて生き延び，成功した芸術家となって落魄のメルン伯爵家を蘇生させるかもしれない。あるいは旧来の家族主義を超えた個人として力強い歩みをつづけ，個としての生を十全に展開することになるのかもしれない。小説の終結部でカイ少年の登場頻度が増し，滅んでいくハンノーとの芸術に媒介された交情が大きく取り上げられていることは，『ブッデンブローク』という没落の物語に作者が忍び込ませたささやかな希望の種子である。芸術によるある一族の没落を描いたこの処女長編の数年後，カイ少年はもうちょっと作者に近い姿，すなわちハンノーと合体した姿になって再登場することになる。トニオ・クレーガーという名のその少年は，芸術家気質のもたらす苦しみに耐えて生き延び，作家の道を歩むことになるのである。

注

トーマス・マンの作品からの引用・参照箇所の呈示は原則的に次の全集に拠るが，小説『ブッデンブローク家の人々』からのものについては，本文および注のカッコ内に（B1）のように Buddenbrook の頭文字

と頁数を示し，それ以外の作品からのものについては本文中のカッコ内および注の内部に巻数と頁数を示した。

Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe Werke Briefe Tagebücher,* Hrsg. von Heinrich Detering, Frankfurt am Main 2002 ～

1）Vgl. Peter de Mendelssohn: *Der Zauberer, Das Leben des deutschen Schriftstellers Thomas Mann,* Bd.1, S.441f.

2）Thomas Mann: *Briefe I 1889-1936*, Hrsg. von Erika Mann, Frankfurt am Main, 1979, S.25.

3）野田宣雄によれば，「19 世紀半ばすぎのドイツのとくにプロテスタント地域は，同時代の他のヨーロッパ地域とくらべて，人びとの教会出席率がきわだって低い宗教色の希薄な世界となった」という。『歴史に復讐される世紀末』 PHP 研究所　1993　277 頁

4）Vgl. Max Weber: *Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus,* Springer Fachmedien Wiesbaden, 2016, S.59ff.

5）Immanuel Nover: *Dekadenz*, in: Buddenbrooks Handbuch, Hrsg. von Nocole Mattern und Stefan Neuhaus,Stuttgart, 2018, S.149.

6）この教義問答は現実にはリューベックで 1837 年に発刊された。Kommentar, 1.2-230

7）『ブッデンブローク』の登場人物の年齢については Mendelssohn のトーマス・マン伝（注 1 参照）に添付されたマン家家系図（Familientafel Mann）に付記されたブッデンブローク家家系図（Familientafel Buddenbrook）を参照。

8）ロマン主義と歴史主義の関連について，H.G. シェンクは「未来に対して危惧の念を抱く者はしばしば過去に向って郷愁のまなざしを投げ，さらには或る過ぎ去った時代に生きようとすら試みるものである。これこそロマン主義のもっとも特徴的な側面の一つであった」と書いている。『ロマン主義の精神』 生松敬三・塚本明子訳　みすず書房　1975　44 頁

9）Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1974, Bd. Ⅺ , S.380f.

10）S.F. ブラウン 『プロテスタント』 五郎丸仁美訳　青土社　2003　74 頁以下

11）田村栄子 『若き教養市民層とナチズムードイツ青年・学生運動の思想の社会史―』 名古屋大学出版会　1996　34 頁

12）同上　35 頁

13）同上　39 頁

14）同上　43 頁

15）F.W. グラーフ 『プロテスタンティズム　その歴史と現状』 野崎卓道訳　教文館　2008　155 頁

16）同上　150 頁以下

17）同上　155 頁

18）Peter de Mendelssohn; a.a.O., S.301

19）Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral, Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe*, Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin, 1968, Bd.VI-2, S.280

20）小説の終わりの 1877 年の時点で 75 歳であるゼゼミ（Vgl. B-832）と，1800 年生まれのジャン領事は同世代である。

Buddennbrooks and Protestantism

Shuzo TAKAYAMA

Abstract

Although Thomas Mann was not a man of faith, his works feature many Christian motifs. For Mann, Christianity, as the basis of European culture, was a subject of great interest throughout his life. *Buddenbrooks*, a novel set in the bourgeois society of late 19th-century Germany with Protestantism as its spiritual base, is Mann's first work to deal with religion in earnest. This novel presents a vivid portrayal of the workings of Protestantism in this society, captured through the everyday details of people's lives. The story is set in an era of great social change that was also a period of decline for Protestantism. *Buddenbrooks* thus chronicles the history of the decline of a traditional bourgeois family over the course of four generations as it gradually loses its hereditary faith while being unable to respond to social changes, including the advancement of capitalism and the rise of the *bildungsbürgertum* (the educated new bourgeoisie). This paper focuses on the course of this family's downfall and loss of faith.

Keywords: *Buddenbrooks*, Protestantism, bourgeois society, art, *bildungsbürgertum*/educated bourgeoisie